

## 11 明倫短期大学におけるデンタル・ユニフォームの色彩に関する意識調査

木暮 ミカ (歯科技工士学科), 金子 潤 (歯科衛生士学科)

【緒言】本研究では、一般的な歯科医療施設におけるコ・デンタルスタッフのユニフォームに対する色彩イメージのアンケートを行い、この結果を因子分析することにより得た感性パラメータを軸として形成される心理空間を検証したので報告する。

【調査概要】調査期間は平成14年11月～12月で、被験者は本学学生および教員・歯科医師・歯科衛生士計248人(男99人/女149人)であった。

実験方法：被験者にシミュレーション画像を提示し、「歯科医療用ユニフォームとしてのイメージ」について①SD法による色彩イメージの印象評価測定②正規化順位法による色彩嗜好と評価の測定の2種類を行った。①では評価対象である20の色刺激を日本色研のPCCS Hue Tone Systemに準拠して分類し、20の感性語対を用いて5段階評価のSD法により印象評価測定を行った。②では心理的イメージを調べるための官能検査として、順位法による調査を行い、ユニフォーム

の嗜好色の点数化集計を行った。

【結果と考察】各被験者の職種毎の評定を標準化し、各Tone毎に20感性語対毎の平均値を求め、Image Profileを作成したところ、Vivid tone/coolが好ましくない感性語寄りの位置にて変動幅が最も少なかった。次にToneの違いによる印象評価の傾向を把握するために、因子分析を行ったところ、第一因子は親しみやすい－親しみにくい、好きな－嫌いな、清潔な－不衛生な等で構成される「Hospitalityを表す因子」、第二因子は控えめな－大胆な、地味な－派手な、保守的な－進歩的な等で構成される「Individualityを表す因子」であるといえ、Pale toneがプラス側に、Dark toneやLight grayish toneはマイナス側に布置されたことと、嗜好色ではマンセル値 $n=9.5$ が支持されていたことより歯科医療用ユニフォームに対する色彩イメージは高明度・低彩度色の評価が高いことが明確になった。

## 12 歯科医療面接 学生の動機づけと意識調査について

○山田 隆文 (歯科衛生士学科)

近年、歯科医療分野でも患者さんとのコミュニケーション能力が重視されている。これは、歯科医師教育だけでなく、コデンタルスタッフにおいても同様であり、歯科衛生士教育でも既に医療面接の講義・実習が始まっている。

その重要因子である医療面接の三本柱の

- ① 患者理解のための情報収集
- ② ラポールの確立と患者の感情への対応
- ③ 患者教育と動機づけ

の背景となる学生の意識に注目し、動機づけ、及び意識調査を行った。

講義の際に、医療・介護系の媒体を観賞させ、医療従事者として好ましい態度や気持ち、患者さんの気持ちや感情の変化などを、心理面やボディランゲージなどの行動・態度面などの分析を通して感性を賦活するとともに、動機づけを行い、その内容についてアンケート調査を行った。

また、交流分析、及び、対人依存型行動特性・自己抑制型行動特性・問題解決型行動特性などの行動特性

尺度、自己価値観尺度などの心理テストを施行した分析結果を報告する。

アンケート調査の結果では、ほとんどの学生は優しさや思いやりなど、医療人として患者さんに接するための十分な感性を有し、また、しっかりとした歯科衛生士の理想像を持っている

交流分析の特徴としては、思いやりなどのMP(母親的部分)は十分に持ち合わせているものの、冷静な判断力などA(大人)部分が欠けているものが多く、全体としてはN型・M型が多く見られる傾向にあった。

一方で、心理テストによる行動特性の特徴としては、比較的依存心が強く、先生や両親などの前ではイイコであり、問題を自分で解決するなどの現実的な気持ちが弱く、自分の言動に自信の弱い自己イメージが悪いタイプが非常に多く見受けられるという結果であった。

以上の結果をふまえて、今後の教育に活用していきたい。